

いよし国際交流の翼

中国山東省訪問記

いよし国際交流の翼訪問団35人は、10月25日から29日までの5日間、中国山東省を訪問しました。

孔子の生地「曲阜」、道教発祥の地「泰山」、中国の台所「寿光」、海に浮かぶ真珠「青島」など、中国の悠久の歴史に触れる世界遺産の訪問。また、曲阜実験小学校や青島大学の学校訪問。そして、青島大学で日本語を学ぶ学生との交流会。

中国山東省訪問団の参加者は、この5日間を通じて何を感じ、また何を学んだのでしょうか？この訪問団に参加した3人の方の報告書をご紹介します。

報告者

○曲阜実験小学校訪問（2日目）

「学校訪問を終えて」

渡邊 孝子さん（稲 荷）

○洛城蔬菜園視察（3日目）

「ピニールハウス栽培について」

岡田 清満さん（尾 崎）

○青島大学訪問・

青島大学生との交流会（4日目）

「二ハオ」から始まる国際交流

橘 里恵さん（稲 荷）

スケジュール

1日目	青島空港～曲阜
2日目	曲阜市大沂河公園にて記念植樹 曲阜実験小学校訪問 世界遺産「孔子廟」「孔子府」「孔子林」見学 泰安市「岱廟」見学
3日目	世界遺産「泰山」見学 寿光市「洛城蔬菜園」視察
4日目	青島市内見学 青島大学訪問 青島大学生との交流会
5日目	青島空港発

写真：山東省泰安市「泰山」





「学校訪問を終えて」

渡邊 孝子さん 稲 荷

「いよし国際交流の翼」の教育視察の一つとして、曲阜実験小学校を訪問しました。

バスの中で現地ガイドの金さんに「二人っ子」政策について尋ねると、子どもに対する期待が膨らみ、幼稚園からお金が掛かるということ、また、高い教育水準を希望し、都会の学校への志向が強く、地方の学校の児童が減っていると聞かされて驚きました。経済的に豊かになっていく親の期待を背負った二人っ子の子どもたちの様子が見られることを楽しみにしていました。

実験小学校は、中国山東省の西南に位置し、児童数3,360人、日本と同じく1、6年生、1クラス約60人、1学年は8学級、教師183人のマン

モス校で、山東省では、学力的に中流のことでした。

校内には、鉄棒・のぼり棒・すべり台等、日本と同じような遊具が並んでいました。特に異なっていたのは、運動場の端に広いスペースを確保し、卓球台が16台もあり、また、その運動場は、トラックがアンツーカー（舗装材）できており、フィールドは軟質のボードのようなものを敷き詰め、地肌が見える所が全くないことでした。日本の運動場とはかけ離れていました。子どもたちの服装はさまざま、ジャンパー・セーターにズボン、そして足元はブーツ、運動靴と各家庭の教育の延長が学校へそのまま持ち込まれているかのように思えました。

視察団を迎え入れた会議室で、校長先生から学校の教育目標や教育理念についてご指導をいただきました。特色ある学校づくりの一つとして、理科に力点を置きながら、将来を見据えた英語教育にも力を入れているとのことでした。ただ、「知育」教育の偏重がみられる課題があり、「徳育」教育の重要性を痛感しているとのことでした。また、孔子生誕の地にふさわしく、孔子

が唱えた儒教を中心に心の教育を推進しているとのことでした。

その一場面として、5年生の授業参観をしました。始まったのは、論語の暗唱で、全員が体全体からしっかりと声を出していました。その生き生きと自信のある姿には感嘆するばかりでした。その児童らは、本一冊の論語を全部暗唱すると聞き、再度驚きました。

また、授業の間には、1,500人余りの子どもたちで運動場がいっぱいになり、フォークダンスが始まりました。手をつなぎ、笑顔いっぱい体を動かす表情の豊かさとその迫力に感動しました。二人組で余った友達3人組にと、そつと手を差しのべる姿も見られ、いじめや仲間はずれをなくす指導をしていると言われたことが実践されている光景でした。

教育内容や教育方法は異なっているけれど、子どもたちは元気で明るく、一人ひとりの目が澄んでいるのが印象的でした。この子どもたちが大人になった時には、日本と中国の友好が一層深まることを願って学校を後にしました。



「ビニールハウス 栽培について」

岡山 清満さん 尾 崎

「いよし国際交流の翼」中国山東省訪問団の一員として参加させていただき、世界遺産や泰山に登山するなど、多くの観光をし、感銘も多いですが、特に要請もあり、表題ビニールハウスを見学しました。その内容について紹介いたします。

観光3日目の泰安から青島にバス移動しましたが、車窓から見えるのは、広々とした農地が延々と続いており、途中の寿光という地名の所を視察しました。

国営の洛城蔬菜園のビニールハウス団地があり、その集荷場で責任者から、ハウスに関する概要について説明があり、その後ハウスの見学をしました。

説明の概要を列挙すると

○ハウスは、有機栽培である
○ハウスの規模は、総面積138ヘクタール、棟数800棟、ハウス1棟の大きさ縦60m×横12m

○生産される野菜の種類は、キュウリ・トマト・ナスビ等30種類

○ハウス栽培の資格は、一家族（夫に1棟（ただし、妻の要望があれば1棟追加される）

○野菜のすべては、国内消費であり、個人注文と贈答用である。（ダンボール箱に多種類を詰め合わせて出荷）
○農業については、品目を指定し、規制することにも、出荷前にも検査している

○生産者の収入は、家族が生活可能な程度

以上のような説明があった後、ナスビを栽培しているハウスを見学しました。ナスビの生りは思ったより少なかったですが、生長しているナスビの品質は良いようでした。ハウス団地を見学して感じたことは、我々の想像を絶するよう大きなハウスの団地でした。（分散方式を避け、集約方式を採用）また、野菜は中国の一般家庭用ではなく、ある階層以上の家庭を対象としたハウス団地のように思えました。

「二一八オ」から始まる

国際交流

橘 里恵さん 稲 荷

青島大学では、副学長の邵先生や学生の王さんが私たちを歓迎してくれました。まず、邵先生から青島の概況についてお話があり、大学訪問前に観光した青島市は、日本をはじめとする諸外国との関わりの歴史の中で生まれ、そして現在、経済都市として発展を続けていることを学びました。

次に青島大学についてお話がありました。青島大学は学生数3万4千人、教員数2千3百人、開講されている学部も多く、私が通っている大学の2、3倍の規模だと知って、青島大学の大きさを思い知らされました。

会談の後、広いキャンパスをバスに乗って見学し、大きな図書館や運動施設、理髪店や服屋も見受けられて、施設も充実していると感じまし



た。

交流会では、はじめに学生さんが一人ひとり自己紹介をしてくださいましたので、皆さん敬語を使い、日本語を上手に話されるので驚きました。後から、ほとんどの学生さんが大学に入ってから日本語を始めたこと聞き、2年間でこんなに話せるようになるのかと、改めて感心しました。自己紹介では、出身地の事を話してくださいました。ですが、中には青島のある山東省から千キロ以上も遠く離れた省から来ている学生さんもあり、思わず感嘆してしまいました。それだけ青島は憧れの地なのだと思います。

歓談が始まってからは、同じテーブルになった于さん張さんとたくさん話をしました。日本と中国の大学生の違いは、中国の大学生はほとんどが学内の寮に入っており、大学4年間共同生活することだと思っています。私の友人は7割くらいが一人暮らしをしていて、あとは自宅から通うが、大学の寮に入っても、途中で出て一人暮らしを始める友人が多く、大学生で一人暮らしができるということは、決して当たり前のことではないのだと思えました。

日本語学科の学生さんは、観光ガイドや通訳になりたいとか、日本企業や貿易、航空会社で働きたい、公務員になつて外交の仕事がしたい、などの夢を持って頑張っているそうです。日本語を学びたいと思うたきっかけは様々ですが、それが「日本のアニメが好きだから」という事を于さんから聞き、日本のアニメや歌手の話題で盛り上がりました。そんなころ、全体でのレクレーションも始まりました。学生さんは歌もたくさん知っていて、準備してくれていた日本の童謡や歌謡曲と一緒に歌うことができたし、歌の後は伊予市の伊予踊りをみんなで輪になって踊ることもできました。最後は全体で手をつなぎ、「見上げてごらん夜の星を」を合唱し、あの時の、国を超えての一体感はずっと心に残るような、印象深いものでした。こうして、楽しい交流会は幕を閉じました。



▲青島大学の訪問



▲曲阜の特産品「硯(すずり)」



▲大沂河公園での記念植樹



▲青島大学の学生との交流会